アリラ・ジーガート演出、ルウツ・ドゥ・ヴェール指揮で歌手アンサンブルも素晴らしい
ブラウエン・ツヴィッカウ劇場「ドン・ジョヴァンニ」公演

き、抱きしめて離そうとしない。彼女がドン・ジョヴァンニ（谷口伸）の魔力に抗えず彼の求めに応じた事を如実に読み取らせている。二重唱「お手をどうぞ」では、ツエルリーナ（ウタ・ジモーネ）の内的葛藤が指先の微妙な動きで示され、ジョヴァンニに手を捕まれると彼女が攻勢に出始め、格子の影で様子を伺っていたエルヴィーラ（ユリアーネ・シェンク）が止めを刺す。ドゥ・ヴェール指揮フィルハーモニーの演奏も素晴らしい。舞踊家、振付師でもあるA・ジーガート演出では、スローモーションの動きやダンスを加えて、騎士長以外の登場人物の全てがドン・ジョヴァンニとエロスの関係で結ばれていることを如実に表している。舞台装置はハンス・ディーター・シャール、回り舞台が扉のある屋敷の壁、窓の格子とベランダの舞台、墓のある城の大広間等に変わる。現代を基調としたマリー・ルイーゼ・シュトラントの衣装も良い。セレナード「窓辺に出でよ」では、マンドリンを手にした騎士長（ニコラウス・メール）が現れ、従者レポレロ（ヒンリヒ・ホルン）姿のジョヴァンニが恐れをなしてベランダに蹲る。終幕で石像に手を差し伸べたジョヴァンニが苦痛に喘ぎながら消える。最後にアンサンブルが6重唱を歌う場に谷口伸が酒瓶を手にして現れ高笑いするところで幕となった。谷口は風邪のため舞台で演じるだけだったが、筆者は彼の素晴らしい声を既に聞いている。当夜はゲラ劇場専属の小森輝彦が舞台の裾に立って劇的な歌唱を聞かせた。終演後熱狂的な喝采が続いた。（11月21日、ブラウエン）

ブラウン・ツヴィッカウ劇場「ドン・ジョヴァンニ」(© Marcus Lieberen)